

日本芸術文化振興会の養成事業

富山大学名誉教授 森田 信一

邦楽の担い手を育てる場所の一つとして、伝統芸能の公演を行っている国立劇場を考えなければならぬだろう。昭和 41 年に作られた国立劇場法（平成 14 年には、独立行政法人日本芸術文化振興会法）には、わが国古来の芸能の公開、伝承者の養成、調査研究を行うことが目的として述べられている。

国立劇場の建設については、明治の初めころから構想があったようだが、なかなか実現せず、戦後になってようやく実現に向かって動きが始まり、1960 年代に入って具体的な計画が始まった。1966 年に、まず伝統芸能の保存・振興を目的として特殊法人国立劇場（現独立行政法人日本芸術文化振興会）が設立され、各種伝統芸能の公演を行うだけでなく、その担い手の養成の役割も担うことになった。

従来、伝統的と言われる技芸は、町の師匠のところでの師弟関係の中で養成され、また歌舞伎俳優などは、門閥制（親から子）、または徒弟制度の中で養成が行われてきたものだった。いっぽう文楽は、歌舞伎の主演級の俳優が主として世襲であるのとは違い、もともと文楽の家の後継者ではない人も多い。いずれにしても時代の流れとともに入門者が減少してきていた。これは時代の流れの中で、ラジオ、映画、テレビなどが順次登場し、メディアの多様化による人々の行動の変化が原因と考えられる。また古典的なものが理解しにくかったり、現代的感覚に合わないということもあるだろう。伝統芸能といわれるものでは、古い演目・様式を継承、保存することも役割であろう。しかしそれだけで現在の聴衆に訴えるのは難しいわけで、なにか時代に対応した工夫が必要となる。スーパー歌舞伎のように大胆な改革も一つの方法かもしれないし、あるいは、伝統を継承しながらも、少しずつ新しい感覚を取り込むような演出、演技を工夫する努力も必要ではないだろうか。時間をかけて徐々に変化していくような工夫である。

さて、東京千代田区にある国立劇場の運営組織である独立行政法人日本芸術文化振興会では、歌舞伎だけでなく、大衆芸能、文楽、能楽、組踊などの公演とともに養成（伝統芸能伝承養成事業）を行っている。養成は歌舞伎（俳優、音楽）と大衆芸能（寄席囃子、太神楽）は国立劇場、能楽（三役）は東京渋谷区の国立能楽堂、文楽は大阪の国立文楽劇場、組踊は沖縄の国立劇場おきなわで実施されている。それぞれ種目によって、2 年間、3 年間、6 年間などの研修期間で養成が行われている。受講料は無料で奨励費の貸与もある。研修は平日午前 10 時から午後 6 時までに行われている（組踊は月曜日から木曜日の夜間となっている）。応募資格はコースによっても異なるが、おおむね中学校卒業以上、23 歳以下となっている。この養成事業は、歌舞伎俳優の後継者不足に対応するということから始まった。

まず1970年に歌舞伎俳優の研修がスタートした。

1972年には文楽（太夫、三味線、人形）の研修が始まる。

1975年には歌舞伎音楽（竹本）の研修が始まった。竹本とは歌舞伎における義太夫節の演奏者で、役割として、三味線と太夫の語りがある。

1980年には大衆芸能（寄席囃子）の研修が開始された。これは、寄席で落語家が登場する際の曲（出囃子）の演奏者を養成するもので、研修では、長唄、三味線、端唄、小唄、鳴物などを勉強する。

1981年には歌舞伎音楽（鳴物）の研修が始まる。歌舞伎の鳴物とは、太鼓、鼓、などいろいろな楽器を担当するもので、舞台の下手（客席から見て左手）の黒御簾の中で、長唄とともに、様々な効果音やBGMを担当している。

1984年には能楽（三役）の研修が始まる。ここでは、ワキ方、囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）、狂言方の3つの役割がある。

1995年には、大衆芸能（太神楽）の研修が始まった。これは、寄席などで行われる曲芸である。

1999年には歌舞伎音楽（長唄）の研修が始まる。

2005年には組踊の研修開始。これは沖縄に伝わる組踊という芸能の研修で、立方と地方（歌、三線、箏、笛、胡弓、太鼓）を学ぶ。

このように養成事業は9つの分野に広がっている。研修期間は、歌舞伎俳優が2年、文楽が2年、歌舞伎音楽では、竹本と鳴物が2年、長唄が3年、能楽が6年、太神楽が3年、組踊が3年など、分野によって違いがある。

国立劇場の最初期から養成事業の立ち上げにかかわった佐々木英之助著「日本一小さくて贅沢な学校」（淡交社、1993年）には、1970年の歌舞伎役者養成の募集に応じて集まった一期生が紹介されている。願書提出者14名のうち11名が受験し全員が合格した（10名が修了）。年齢は15歳から24歳、学歴は、中学卒業、高校卒業、大学卒業、中退など。出身地は東京、京都、北海道、長野県、長崎県などであった。

また日本芸術文化振興会のサイトには、「現況」として、令和4年4月1日現在の研修修了者の割合が示されている。

歌舞伎俳優：就業者299名に対して研修修了者が98名（32.8%）

歌舞伎音楽（竹本）：就業者34名に対して研修修了者が30名（88.28%）

歌舞伎音楽（鳴物）：就業者40名に対して研修修了者が15名（37.5%）

歌舞伎音楽（長唄）：就業者46名に対して研修修了者が11名（23.9%）

大衆芸能（寄席囃子）：就業者29名に対して研修修了者が27名（93.15%）

大衆芸能（太神楽）：就業者23名に対して研修修了者が10名（43.5%）

能楽（三役）：就業者380名に対して研修修了者が29名（7.6%）

文楽：就業者 85 名に対して研修修了者が 48 名 (56.5%)

組踊：就業者 251 名に対して研修修了者が 47 名 (18.7%)

同サイトでは、研修で育った人たちの紹介も見られる。

歌舞伎では、市川新十郎さん。1988 年から 1990 年の研修後、歌舞伎俳優として活動している。歌舞伎音楽（竹本）では、竹本翔太夫さん。2009 年から 2011 年の研修後、竹本の太夫として活動している。歌舞伎音楽（長唄）の杵屋巳勇次さん。学生時代に歌舞伎を鑑賞したのがきっかけとか。2002 年から 2005 年の研修後、唄方として活躍している。太神楽では、鏡味味千代さん。2007 年から 2010 年の研修後、寄席などでやるほか、結婚式や叙勲のパーティーなどでも実演する。獅子舞やお囃子、茶番など、いろいろな芸も身に着けている。能楽三役では、加藤洋輝さん。学生時代に能楽サークルに入ったのがきっかけとか。1999 年から 2005 年の研修を受けて、太鼓方として、能、狂言の能舞台後方で楽器を演奏する囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）のうちの太鼓方で活動している。文楽では、豊竹希太夫さん。2002 年から 2004 年の研修後、太夫として活動している。

歌舞伎の役者としては、14 期生の中村梅乃さんが女方として活躍している。また 1 期生の中村吉三郎さん（立役）は、役者志望だったが、それにはまず歌舞伎を芝居の基礎として学ばなければならないと考えて国立劇場の養成に入った。2 期生の中村歌女之丞さん（女方）は、高校生の時に見た歌舞伎鑑賞教室で歌舞伎に興味を持ち、雑誌の募集記事で国立劇場の養成を知って応募した。9 期生の市川猿四郎さん（立役）は、祖母に日本舞踊を薦められていたが、歌舞伎座で芝居を見て養成に応募した。24 期生の中村蝶也さん（立役・女方）は、地元の芝居小屋で行われていた地芝居で子役として出演経験を持っていた。

現在このように養成を修了して、多くの人材が育ち、様々な舞台で活躍している。国立劇場の養成は、伝統芸能を継続していくために大切な役割を担っていると言うべきものだろう。